R3 秋期講演会 大会報告

文責 2年筒井誠也

令和3年度文化財学会秋期シンポジウムは、11月6日土曜日にオンライン形式で開催された。講演会は、「中世石造物が語る熊本城築城前のすがた」と題し、熊本市文化市民局文化財課の熊美濃口雅郎氏を講師に迎え開催した。

シンポジウムの冒頭では、熊本城内に存在する中世石造物の現状として、熊本地震で倒壊した熊本城の石垣から発見された図像板碑が紹介された。熊本城の石垣から発見された図像板碑には観音像が確認でき、その形態から「阿弥陀三尊来迎図」であると考えられた。九州には熊本城で一部が発見された大型の板碑の類例が少数ではあるが存在し、そのような類例から石垣から発見された来迎図の一部は、大型の板碑を割って石垣に転用したものであると考えられている。また、板碑の他にも熊本城の各所からは、五輪塔などから転用されたと思われる石像物大量に発見された。それは量だけでなく13世紀から16世紀、大型から小型、硬質から軟質と年代、形状、素材から見ても多く種類のものが発見された。そのため、熊本城の石造りの部分には石の特徴を活かして使用されており、板碑のような大きくて堅い石で作られた石造物は強度があるため、適当な大きさに割られて石垣の築石に使用された。一方で五輪塔のような小さて柔らかい石を使用した石造物は強度を必要としない階段、排水溝、石列といった箇所に使用されが、それらは発見された五輪塔の一部であり、軟質石材を使用した五輪塔の多くは石垣の築石を安定させるための裏込めに使用された。

講演会の中盤では、最初に解説された五輪塔から見る墓制の変化が解説された。熊本城で発見された五輪塔は、年代が幅広くわかれていたが、発見された五輪塔を形状から年代別に分類してみると時代を降ると同時に明らかに量が増えていることが判明した。このような五輪塔の量の変化には、墓制の変化が関係しており、五輪塔の増加が確認できる中世後期においては埋葬方法である火葬や土葬、個人墓から集団墓といった変化が確認されている。講演では、これら変化を九州の白岩西遺跡、城南町尾窪遺跡、あさぎり町勝福寺遺跡を例に、これらの変化が中世後期に起きた理由として鎌倉時代後期の武家の所領継承が分割相続から単独相続に移行した惣領制への変化が要因であると解説された。この惣領制の変化が墓制の変化に与えた影響としては、鎌倉時代前期までの一族で分けて継承する分割相続が土地の分割化に伴い困難になり、庶子を家臣化した惣領制による単独相続が一般的になった。この惣領制への変化により、一族の構成員が増加したことで、従来までの屋敷の傍に個人を埋葬する屋敷墓の形式居住域から、居住域から少し離れた丘陵地に一族の墓を造るようになった、また、こうした墓制に合わせて石塔が多く造られるようになった理由としては、埋葬形式が土葬から火葬になったことからもいえるように、舎利信仰の興隆により、埋葬者と仏を繋ぐ役割のあった石塔の需要が増えたことが理由として考えられている。それと同時に、このような石塔の量化からは、墓を造る層の拡大や低層化を読み取ることもできる。

講演の終盤では、ここまでの講演の内容を踏まえ熊本城築城前の姿が解説された。熊本城が造られる以前の姿は、15世紀後半に描かれた絵図「茶臼山ト隈本之絵図」から当時の風景を見

ることができる。この絵図からは、多少の誤りはあるものの高台に置かれた観音堂、その道中に点在する墓を見ることができる。このことから熊本城築城前の茶臼山は、墓地の中心である山頂の観音堂を中心にした集団墓地があったことが分かる。これらは、後に熊本城を築城する加藤清正に関連した墓地ではなかったため、清正は茶臼山の墓地を破壊して築城を行っている。そのため、熊本城の石垣から発見された板碑などは、築城以前に茶臼山に存在した石造物が破壊後転用されたものであると考えられる。このような石造物の転用は、築城にあたって清正が石材入手の石狩りを墓地から行ったようにも思えるが、茶臼山周辺には石材の供給地が近くにあったため築城を行う上で土地を整備した結果廃棄された板碑や石塔などの石造物を石垣に転用したとされる。清正の石狩りを否定する根拠としては、石塔の造立自体は、死者と仏を結縁する役割があるが、近世においては、中世の国人領主層没落と同時にそこは新たな近世社会へと転換していくため、中世期の石塔類を転用・廃棄することは一般的だった。また、このような中世石造物の廃棄は江戸時代の儒教の普及と儒式墓の採用による墓石の変化も関係した。そのため、清正が熊本城築城の際に行われた茶臼山の墓地破壊は、石狩りでも仏教を敵視した行動でもなく、その土地の国人領主層の没落と共に行われた新しい社会インフラ整備であり、中世社会では古いものを廃棄するだけの当たり前の行為であったと解説された。